

公事根源集釋

中

十八卷圖書

73
6781
2



6781
2

不動倉の江次第四
不動穀有古委新委之
之二色不動倉穀若干
石糶若干石也

○康保元年官符天曆
官符以正稅遺爲不動

○延喜式十二中務省
式云凡諸國所進不動

倉備者官副國解下省
省即勅收庫若應出下

者待官符下然後出充
七瀬所其數多此記

名々浴中七瀬又小
七瀬云本七瀬上云六

難波 田菟島 河後
攝津 大島 橋小島

山城 佐久册谷
幸崎 近江北大七瀬ト

モ云也

三十一 奏書奏

○臣等書乃奏也九月小あふたれと一紀日
浅之ひりく大治新く奏止循國乃
編修く不勤れ余ひりくんとやふあをなら
改始小あひりくも文也大治陣小治きく
二體又ととれきくきそとわりてのら
御殿くて奏すもととやあ事いさるを
よあよりと

三十七 七瀬沖波

後醍醐十五日ヨリサキ吉日ニテ御被ラコナル五位殿上人使手瀬向フ
是ハ毎月乃事也七瀬といハカハ合ハ除門

公書根原中

昭和九年四月五日
三十一
贈

八形稜具也。釋日本紀云人形者所謂素戔鳴尊之隘觸板手足之贖其罪身代之義也

靈所七瀬。拾芥六靈所上六カリ仁治三ノ在成説注付之

八三才流

在場中^江沖門^三大炊^イ沖門^三一糸^ノ丁糸^ノ終^七七瀬^ノは^ノ陰陽^ノ作^人形^ノ奉^ノ至^ノ沖^ノい^ノき^ノけ^ノ沖^ノ力^ノと^ノあ^ノり^ノ一^ノ終^ノい^ノ敵^ノと^ノ法^ノゆ^ノは^ノ法^ノ而^ノけ^ノ川^ノ原^ノ小^ノじ^ノふ^ノつ^ノり^ノま^ノい^ノま^ノし^ノ沖^ノ極^ノ物^ノと^ノめ^ノと^ノま^ノの^ノ場^ノ海^ノそ^ノり^ノ外^ノさ^ノし^ノら^ノ事^ノ行^ノ一^ノ後^ノ冷^ノ泉^ノ院^ノ沖^ノ時^ノ陽^ノ月^ノ小^ノ靈^ノ下^ノ七^ノ瀬^ノ乃^ノ沖^ノ後^ノと^ノお^ノか^ノり^ノと^ノれ^ノ而^ノ小^ノ耳^ノ敏^ノ門^ノ河^ノ合^ノ東^ノ瀬^ノ松^ノ湯^ノ石^ノ影^ノ西^ノ瀬^ノ一^ノ年^ノ川^ノ行^ノと^ノ也^ノ

三十八 火災沖祭

拾芥下本朱雀門前タヌ 北河瀬 西園寺東仁正寺鳥部 北野北

あはれ^ノ月^ノと^ノれ^ノ事^ノ也^ノ陰陽^ノ作^人形^ノ是^ノと^ノり^ノお^ノか^ノり^ノ小^ノ火^ノ事^ノと^ノ少^ノ場^ノ之^ノ功^ノ能^ノあ^ノら^ノし^ノ一^ノ董^ノ仲^ノ解^ノの^ノ祭^ノ書^ノと^ノり^ノ小^ノ物^ノお^ノか^ノり^ノと^ノり

三十九 代厄沖祭

是^ノも^ノ月^ノと^ノれ^ノお^ノか^ノれ^ノと^ノ教^ノま^ノは^ノ賜^ノ母^ノの^ノ法^ノと^ノも^ノし^ノと^ノ終^ノと^ノば^ノり^ノ一^ノき^ノお^ノ書^ノり^ノ終^ノと^ノり

二月

四十 釋奠

上丁日

是^ノの^ノ年^ノお^ノか^ノり^ノ二^ノ月^ノと^ノ八^ノ月^ノと^ノあり^ノと^ノれ

公事根原中

上柱

○論語先進篇云德行類淵閔子騫冉伯牛仲弓言語宰我子貢政事冉有季路文學子游子

夏

宴穩座。江次第釋奠之說上卿以下著宴

座履宴座官廳也上卿東參議西辨山納言外

記史而紀傳博士面

又云王卿移著穩座上

脚南參議東辨山納言

陳在參議後文臺小床

子在中央儒者文人北

面床子二重抄云穩座

者非嚴重威儀之坐自

他舒懷故曰穩

釋奠昨トモシラ

後醍醐羊中行事釋奠

昨ト昨トミシラカ多手

禮記王制一王制此

○禮記文王世子云凡始立學者必釋奠于先

聖先師及行事必以幣

又月令仲春之月上丁

命樂正習舞釋菜

○史記孔子曰受業身

通者七十有八人素隱

曰孔子家語亦有七十

七人唯文翁孔廟圖作

七十二人

八事原中

三

丁卯日... 日能國

忘形... 孔子

大學... 孔子

乃... 孔子

江次第... 孔子

博士... 孔子

周易... 孔子

日... 孔子

日... 孔子

日... 孔子

日... 孔子

日... 孔子

日... 孔子

日... 孔子

日... 孔子

日... 孔子

日... 孔子

日... 孔子

日... 孔子

日... 孔子

日... 孔子

日... 孔子

日... 孔子

日... 孔子

日... 孔子

日... 孔子

日... 孔子

日... 孔子

日... 孔子

○學令集解云開元令
云釋奠為中祀州縣釋
奠亦准小祀例神護景
雲二年七月卅日官符
云應改孔宣父為文
宣王事右得式部省解
偶大學寮解備助教正
六位上膳臣大丘牒備
天平勝寶四年大丘隨
使入唐問先聖之遺風
膠庠之餘列國子監有
西門題曰文宣王廟時
國子學生程覽告大丘
曰今主上大嘗備範道
改為王鳳德之徵于今
至矣然准舊典猶稱前
早誠乖崇德之情失致
敬之理大丘庸聞聞斯
行請敢陳管見以請明
斷者勅号文宣王今位

狀理須必然方行其
今旌厥德後天奉天時
蓋謂此乎仍顯改由請
官執者官議奏聞奉勅
候奏
○續日本紀廿九三七此
事

興國渡之○江次第
裏書或說曰吉備大臣
入唐持弘文館之畫像
來朝安置大宰府學業
院大臣又命百濟畫師
奉圖被本置大學寮云

一曰周公と先聖といひ孔子は先師と曰ふ
孝と漢唐と宗貞觀二年小改く先聖先
師といふ孔子執回と一と又神護景雲
二年孔宣父と改く文宣王と一と一弘
仁格ふれ一と一今大學寮小祀に先奉る孔子
十哲の叙は異國より渡て我朝累代の
物として傳ふるなりと傳へり
甲子
春日祭
上申下
是も二月十一日小改りて先奉る日使に
行を傳る中少將は此を尊聖と改りて奉る

一と一 府官人擲糝と云く舞人法を傳
流るひ無名門より入るふありて事乃定と
奏と舞人もけり録いふと苑人いふと
流るるよりき一と一 流るる日乃定と
流るる日乃定と苑人車奉るると一と一 辨
流るる日乃定と一と一 清和天皇自
觀元年十一月九日改めいふと一と一 流
春日回而大由律と一と一 奉るる日乃定と
殿の武甕槌命才一と一 流殿の武甕槌命才
三、流殿の武甕槌命才一と一 流殿の武甕槌命才

八書限原

○春日秘記同二年十一月九日申三笠山頂官柱立三所御座四年正月十二日寅三笠山下津磐根南向官柱立御遷官在之其時第四御殿奉祝副也長者左大臣正一位藤原朝臣永毛御時也

姫大神タケノ姫大神タケノ檮タケノ檮タケノ千千姫命也
○神名秘書云天照大神相殿之姫神檮檮千千姫命於春日者第四神殿坐也

志神カミ是く神護景雲元年六月廿一日武

い原ら命常陸の國麻治より河津まで

取らざるカミ小治原小治原麻カミとて柗此

本此校と河津よりカミ河津小治原

園カミよりカミ郡小つカミ河津小治原

中治乃連時風秀カミといふ人なり十二月

七日小大和國あべ山カミは治せり同カミき二

年正月九日三笠山カミは跡残カミこれ終カミ

り見屋根命カミいひまらカミとて姫大神カミ

河津よりカミ河津カミとてカミ河津カミ

是は神皇正統記の下の事也後醍醐天皇取らりり

はつと治小大和屋根命の河内國平野

より河津よりカミ河津カミとてカミ河津カミ

河津よりカミ河津カミとてカミ河津カミ

トきと治十月九日院宣カミ事カミ

御門よりカミ河津カミとてカミ河津カミ

河津よりカミ河津カミとてカミ河津カミ

河津よりカミ河津カミとてカミ河津カミ

河津よりカミ河津カミとてカミ河津カミ

公事根原中

○今集解釋云伊謝川
社祭大神氏宗定而祭
不定者不祭即大神族
類之神也

○大和國添上郡率川
坐大神御子神社三座
率川阿波神社
今按率川坐大神御子神
率川阿波神
皆率川社、イフヘシヤト一
社率川一社、二枝心得
ハキカ

此神宮内省ニヒスル
事談第五園韓神
本即坐大内跡而遷都
之時造宮之使等可移
他所云于時詭宣云猶
坐此處奉護帝室仍坐
宮内省内云云
○西官記西宮左大臣
高明公作
○北山抄四糸大納言
公任作

○園神不詳
韓神大年神之子也見
舊事紀第四古事記上
卷

まは月し満乃家平思れまつりつる是と
し乃申れ日使と殺遣ちて孫記まひふ
たや

里 率川祭 上酉日
自春日社西二十三町率川明神也

ひ奈の春日奈乃あく新日たこわらる神祇
今小のまら三枝奈と同くまをは月
てまらなり藤氏南家れは行り率川
徳社の大内是公れ建まといつりまら
き事いま三枝奈れ前りのまら

里 園祭 韓神祭 上丑日
中丑日云若有一
丑者用上丑

け二神多又内省り神まは也延原遷
都法附造文使他取小う行りてまら
まらまら小く此取小く沖口と海
前りたてまらんと滝宮まき延喜式小
園神一座韓神二座とのまらり奈神を
年小二まら二月と十月と也との奈内行
ひま儀式まらる事終西文北山江
次形居うれ書小のまらる
里 大原野祭 上卯日
是と年小二まらりけ神社の后まら海

公事根原神

○名目抄云行啓謹着
宮皇₁₀等御出也

太神宮以下
○延喜式第一四時祭
上祈年祭神二千一百
三十二座 國司祭祈
年神二千三百九十五
座

○詩經 西漢篇祈年
風集註 祈年 孟春祈穀
于上帝 孟冬祈來年 于
天宗是也

白猪白鷄 ○式云御歲
杜加白猪白鷄各一
○西宮 勸物云左右京
進白鷄 近江進白猪

いづ粉給りんと先喜日乃奉社と成さふ
く都らんと前ふり成しをいふれ
い大原野乃成_サ成_サなりとて事法成_サ也
仁壽元年二月よりいづ先_サ成_サなり
を清乃使を春白_サ成_サなりとて
辨内侍なりとじふ

四十五 祈年祭 四日

是乃太神文_サ下三千一百世二座乃神と
海_サ成_サなりとて其_サ成_サなりとて
成_サ成_サなりとて其_サ成_サなりとて
國_サ成_サなりとて其_サ成_サなりとて

いづ_サ成_サなりとて其_サ成_サなりとて
て_サ成_サなりとて其_サ成_サなりとて
乃_サ成_サなりとて其_サ成_サなりとて
四年二月よりいづ_サ成_サなりとて
手_サ成_サなりとて其_サ成_サなりとて
國_サ成_サなりとて其_サ成_サなりとて

四十六 祈年 十一日

上御辨乃納言外紀史なりとて其_サ成_サなりとて

公書 限原中

丁ておこりへる公事なり六位以下乃藝
 能あり物と云くびく式了矣了此二者も
 率^ツあ^ツくさい進家^ツ浅^ツ止^ツ乃それとめよ
 端^ツく^ツ是量^ツ容儀^ツとみるゆ^ツの^ツ物^ツ并^ツ小^ツ室^ツ
 程^ツ座^ツ小^ツつ^ツあ^ツく^ツ儀^ツ式^ツを^ツ持^ツ儀^ツと^ツ云^ツひ
 下^ツ乃^ツ冠^ツり^ツさ^ツひ^ツ大^ツ法^ツを^ツ藤^ツれ^ツ花^ツ納^ツ書^ツの^ツ儀^ツ也
 冬^ツ儀^ツ六^ツ位^ツを^ツれ^ツは^ツり^ツた^ツる^ツり^ツ此^ツ冬^ツ儀^ツ以下^ツ
 時^ツ法^ツ式^ツと^ツ云^ツひ^ツなり^ツ公^ツ事^ツを^ツ定^ツ考^ツす
 小^ツ志^ツ別^ツ一^ツ物^ツなり^ツ
 八月十日

小野御忌日 亦旨

古無主荒廢之地也雖
 然依有仁者樂山之因
 緣申請官旨令施八神
 領永爲法華八講料所
 云云 文曆二年八月廿
 三日 大野頭前長領守

廿二社

〇廿二社次第至是廿
 二社由來事
 村上天白康保三年霖
 雨經月八月廿一日被
 奉官幣於十六社
 伊勢 石清水 賀茂
 下 松尾 平野 稻荷
 春日 大原野 大神

二月乃又日^ツは^ツ大^ツ海^ツ大^ツ自^ツ在^ツを^ツ神^ツけ^ツり^ツ何^ツ
 が^ツ給^ツ一^ツ神^ツ日^ツ也^ツ夢^ツれ^ツは^ツげ^ツり^ツ何^ツの^ツ天^ツ仁^ツ
 手^ツら^ツ吉^ツ祥^ツ院^ツと^ツ八^ツ講^ツあり^ツ當^ツ家^ツけ^ツり^ツも
 かし^ツあ^ツく^ツ是^ツを^ツ行^ツふ
 甲^ツ 初^ツ年^ツ穀^ツ奉^ツ幣^ツ

是冬二月七日^ツこ^ツび^ツあり^ツ此^ツ日^ツて^ツ也^ツ

- 伊勢 石清水 賀茂 下 松尾
- 平野 稻荷 春日 大原野 大神 石上 大和
- 廣瀨 龍田 任長 梅文 吉田 廣田
- 祇園 小野 丹生 貴布祿 八幡

八事原中

石上 大和 廣瀬
龍田 住吉 丹生
貴布祿

一條院正曆二年炎旱
送日萬物變色六月廿
四日加吉田廣田北野
三社被奉官幣於十九
社吉田廣田北野次第
事為住吉之次丹生之
上由宣下

同五年二月十七日祈
年穀之日加梅宮被奉
官幣於廿社梅宮事可
為住吉之次吉田之上
由宣下

長德二年二月廿五日
被奉臨時官幣之日加
祇園為廿一社
後朱雀院長曆二年八
月十八日被奉官幣之

日加日吉社為廿一社
日吉事可為住吉之次
梅宮之上由宣下

○一代一度仁王會見
江次第十五

公事根原中

冬中納言賀茂平野松尾春日為宰相在
外之邪四位少進乃つゝひなり力一社とめ
宣命あり伊勢右大臣久馬重茂松尾の如
斯其外冬之黃たふ房小切く天武天皇
思ふ正月法社より幣奉奉る詔天武天皇
六月奉穀と祈願んたあ十一社小奉幣
あしとみゝり

甲九 源時仁王會

春日と云々びく約りて武を三月なり大花
殿紫宸殿清涼殿なりとては事仁王後
國殿若狹淡海と一也ひんり初家法
仰祈時為なり故明天皇六年八月
仁王會あり聖武天皇御外奉奉る六月
之甲なり藤原小房七道よりて約り
まゝ一代一度姓大仁王會とて事
も也終の代一度りこころも事
和

五 倭祿宣

是も奉公時若くして那良百官より程と
終事なり一正陣乃座小つゝとて倭祿

公事根原中

九

トリニ参リ之ハ扇ニミ又御
笏ニミコレヲカケテ御イキ
ヲカリ配膳ニモタセナカラ也
大幣持返テ宮主ニ給ニ宮
主庭上ノ圓座ニテ祝言
左手ニ纏ッテキ人形ヲ
取上散米ヲナトキラス也
宮主退テ御贖物出ス
頭御笏ヲ参ラスモハ出御
後一カニ参ラス是ヨリ御拜
三度アリ云云

兩段再拜ハ例。江次
第抄云御拜三度今案
新儀式西宮等遥拜三
度云云又延喜二年三
月御燈御拜三度然則
兩段再拜雖有例僻事
也無夜之上者不可有
御拜之由間白奏之依
有其理無御拜之由見

御笏也
○裏書云御燈無御拜
例長元九治曆四後醍
醐院帝無御拜云云
○深心院基平公記文
承二年三月御燈不出
川原有由被被了後非
御事是也

佛事故三拜云云法也

御座とあはく三度御拜ありあはく再拜なり
北山抄云本朝之風四度拜禮謂之兩段再拜本是再拜也而疑異三寶及人魚四度
御もゆきさるるを御座なりと事なり大と
後米住持院年号

御津法ありなり一書事也長唐乃以之云云
○中右記寛治六年三月三日丙有御燈如例頭辨候陪膳藏人大輔益道徹
御贖物了後有御拜三度件御拜依爲由御被往昔無之而後米住持院以後猶
有云云御被以後供魚也其前三ケ日御精進重輕服僧尼輩不參内也
宇治乃園白小作あはく御座なり由入御座ハ
頼通公

其理をふらりて御津はなりとれども
代々御津名有りなりや從御津法はなり
とらりてとらりて延唐十三年三月三日
めくは辰法中法なり

五十三 曲水宴 同日

是冬しりし王御行とありて御ありて
侍代化々海々終ありてや御海あり
登りて登りて又人々是法のしりし
村上天皇年号
保法御記よりきりきり又顯宗三
元年三月十三日午後苑り幸りてのり
ありてありてありてありてありて
奉記りしに西ありてありてありてありて
十五
ありてありてありてありてありてありて

公事根原 廿

○李太白春夜宴桃李園亭云飛羽觴而醉月

○漢書外戚傳孝武衛皇后傳云帝被霸上還

孟康曰被除也於霸水上自被除今三月上巳

被禊也師古曰被音廢禊音系

周幽王

○十節錄云三月三日

重餅何哉周幽王淫亂

羣臣愁苦于時設河上

曲水宴或人作草餅奉

幽王王嘗其味為美也

王云是餅珍物也可獻

宗廟周世大治遂致太

之興從此始

○今按此十節錄故事

非也幽王周世之惡王

○周之衰之幽王

○始之草餅幽王始之

○非之草餅之草餅

也本草陳藏器曰荆楚

歲時記云二月三日取

鼠麴汁密和為粉謂之

龍舌餅以壓時氣日本

三鼠麴草ヲハコクナト云母

子ノ心無マニト云祝儀

ヲ表スニ云

所あふ待と能くされ重とよりてのこころ也

相觸減能くさるるわふとけ事一かろく

又上已法のこころ人これ東流能くあふ

ててこころこころ一漢書をよよふ

かきり又草餅を二月三日より用と事

周幽王の事たらわく一し一

えらり

五十四 藥師寺寂勝會 七

淳和天皇壬午号

乙長七年のり藥師寺のて毎七七日寂勝

會の儀をたのむ寺を言武王皇の御成り

五十五 石清水條時祭 申年日

三月十日時法らの奉納の為人使舞人

こころ中折辰乃日試樂乃事有御殿の

ご敬より御侍よりそく御所の公

卿よりふりてとれこころ

よこころ四徳の為人望れ舞と地

下小作と次小年中の事乃隣子法と

せののかりて御氣さうと

試るる儀庭とさく能口のりて

竹臺下ニ竹枝ヲ一十訓抄云一条院御位時實方中將祭試樂ニ進參リテ

カサシ花ヲ給ハサリテ依テ舞人ニカリテハハハ竹臺下ニテ試樂ノ枝ヲ折テサ

廿世

○反歌大比礼返也見江次第抄

○古今大歌所御歌カヘレ物 歌源氏物語

カヘレ聲 幸柳ウタテリ

○調樂笛子トリ箏ハ

調琵琶撥合心

○給重不血五重許五重許近代四重三巡勸之

一重押破也

舞人前二人殿上四位

所衆二人執瓶子相從

陪從座一人五位藏人

螺盃銅蓋近代不行

八幡大菩薩の託宣集

六八幡大菩薩現七十

許老翁爲白髮之體持

白水之弓以藤卷狩俣

之天止曲上令放之給

時言直者波誰加射時

我礼計利古曾者如此

言給射之坐時中于將

門之頸骨而被伐畢公

家爲累代寶物以此藤

卷片手折御矢被納内

タリケル目出度ヨレ人ノホメアヒタリ此ヨリ後試樂ノカサレニ林ノ枝ヲサストフ

て竹流枝をとりくくさし

古八集カレモクウタテリヤキカカサトニヨリテ響クヌラテカサハ梅華カサ秘抄ニ聽ニ煥

律ノミナリテ又本々律ニカレカレカレ物ト云也

村廊ノ下ノミヨリミヨリ

ねりちまの信治を清乃良人おきしこ

しく節華葉の多とあはれ舞人中心

ねりちまの信治を清乃良人おきしこ

あはれ舞人中心

ねりちまの信治を清乃良人おきしこ

あはれ舞人中心

ねりちまの信治を清乃良人おきしこ

あはれ舞人中心

ねりちまの信治を清乃良人おきしこ

あはれ舞人中心

ねりちまの信治を清乃良人おきしこ

あはれ舞人中心

ねりちまの信治を清乃良人おきしこ

あはれ舞人中心

ねりちまの信治を清乃良人おきしこ

あはれ舞人中心

ねりちまの信治を清乃良人おきしこ

南祭石清水臨時祭也
江次第賀茂臨時祭條
云石清水準之但無御
前儀

神祇令云春季鎮華
祭義解謂大神狹井二
祭也
狹井者大神之鹿御靈
也

乙未二月三日らの毎年の事は成約
けり次第日^カ立^カ此儀を南祭の沖あり
免さばら湯殿うて勸告致くはなとに
ゆふ

手六 結義字

是冬^{ヲキ}大神^{カガ}様并^ナの二祭といやと神祇
令りの^{二輪也}也つらま花乃^{ハナ}花乃^{ハナ}終^{ハシ}夜^ヤ神
分^{ワケ}なして人と^トた^タわ^ワ海^{ウミ}はら^ハな^ナよう^{ユウ}終^{ハシ}と
あ^アの^ノり^リん^ンあ^アり^リい^イ祭^{サマ}を^マも^モこ^コう^ウや^ヤ神^{カミ}祇
官^{カミ}う^ウて^テお^オり^リた^タ

手七 京官除日

是は三月三日らの先う^ハた^タお^オり^リた^タ
事^{コト}の^ノも^モふ^フも^モ今^{イマ}秋^{アキ}神^{カミ}祇^シ除^ノ日^ヒと^トな^ナり^リま^マり^リ
冬^{フユ}う^ウも^モお^オり^リな^ナる^ル京^{キョウ}は^ハ何^{ナニ}も^モ徳^{トク}目^メと^ト御
祭^{サマ}う^ウな^ナら^ラ京^{キョウ}官^{カミ}は^ハ尸^シう^ウり^リ概^{ガイ}も^モり^リ
此^{コノ}道^{ミチ}に^ニ入^イる^ル春^{ハル}祭^{サマ}除^ノ日^ヒふ^フに^ニ行^イく^ク^{三者の}
祭^{サマ}を^マも^モこ^コう^ウや^ヤ神^{カミ}祇^シ除^ノ日^ヒと^トな^ナり^リ
二^ニ軒^{ケン}を^マも^モこ^コう^ウや^ヤ神^{カミ}祇^シ除^ノ日^ヒと^トな^ナり^リ
乙未秋^{トウミノアキ}乃^ノ除^ノ日^ヒと^トな^ナり^リな^ナる^ル
水^{ミヅ}の^ノ御^ミ祭^{サマ}

五八

東大寺授戒

延喜玄番式凡授戒者每年三月十日發行
交名當月五日進官

是の二日小一度に孝源天皇太平勝宮
六子之唐乃鑿真和尚授戒し乃大宰府
よりわつるにほきし一に東大寺小戒壇と
なす天子以下菩薩戒をうけ給き是より
利大寺に授戒といふ事いふとまり
さくろしに佛學を聖成をうけ侍給也
いゆわし一さかうりたればりしと事
きあらふと一りり給也

四月

若羽

戒院

中平日也江次第第六齊院
御襖點地上云

更衣

一日

きよの衣づくらんは中衣なる沖衣を
てく掃部寮あらしむ沖殿の帷帳
をひりり下し小胡粉をて懸と
を襖代にあらす沖衣に色
はうしきとまうし沖服に
沖衣がすしこれあはれ沖衣に
の池院寮よりたたくまひに女房かき
ぬわのせりきぬとも多うひらへ

授戒三月中吉日擇り
行ふに也給茶抄り
鑑真和尚事續日本紀
元亨釋書宋高僧傳東
征傳等見
東征傳云於盧舍那殿
前立戒壇天皇初登壇
受菩薩戒次皇后皇太
子亦登壇受戒率沙弥
證修等四百四十餘人
受戒又舊本僧靈福賢
環志忠善順道縁平徳
忍基善謝行潜行忍等
六十餘僧捨舊戒重受
和上所授之戒後於大
佛殿西別作戒壇院即
移天皇受戒壇土築作

○清凉殿御帳間了御
帳四面有儿帳帷夏生
以胡粉畫葦雀公朽木
形見建曆御記

〔五上〕○女官飾鉞ヒトヒ
更衣ヒトヒトヤチセウカラス
ニライツレモカサ子ラ候
又ニヒトヒト事夏ハ紅或ハ
コキ引キ也

（ニクリテ）○舊事紀續
麻作綜云云

茅渚山吉野山 此吉
野山大和吉野山非ハ

後世茅渚茅ヲヨレト讀
渚ヲノ讀マヤリテ舊

事紀經茅渚山ト云ラハ
本ハ八吉野山書ナリ

ソレ又後人經茅渚山
ハ吉野山ト連書タリ

茅渚和泉國ニリ活玉
依姫茅渚人也

ソイトナリワケニワケアリ
○舊事紀見其綜遺スハ

有三紫
三輪山ト申名 ○三紫
靈異ニヨリテ見室山ヲ
三輪ト云ト也

和銅 ○神名帳曰山城
國紀伊郡稻荷神社三

座
或説云保食神稚産靈
神大己貴命

和銅
○元明天皇羊鏡

公事根原

布とていふ紙魚一々りて針と付く如
くしていふくはたの法神人れまは
るるんといふこれ針とてまゝに
りまはる小ほけりといふ一ある女
一のまゝに一てはつらわゝる
はけりといふ鑑の穴よりとまのく
渚山吉野山といふ見家山よま
まのけりといふ大物主神といふ
まのけりといふ三輪山といふ
此事舊事本記小見多し一
はけりといふもみかたはけり
かたは今更なるやうなれとい
かたて一毛ある一はけりとい
此系は貞親のいふりといふ
三三 編苜蓿 同日

三三 編苜蓿 同日
此系は貞親のいふりといふ
かたは今更なるやうなれとい
かたて一毛ある一はけりとい
はけりといふもみかたはけり
此事舊事本記小見多し一
渚山吉野山といふ見家山よま
まのけりといふ大物主神といふ
まのけりといふ三輪山といふ
布とていふ紙魚一々りて針と付く如
くしていふくはたの法神人れまは
るるんといふこれ針とてまゝに
りまはる小ほけりといふ一ある女
一のまゝに一てはつらわゝる
はけりといふ鑑の穴よりとまのく
渚山吉野山といふ見家山よま
まのけりといふ大物主神といふ
まのけりといふ三輪山といふ
此系は貞親のいふりといふ
三三 編苜蓿 同日

公事根原

廿六

和銅 ○神名帳曰山城
國紀伊郡稻荷神社三
座
或説云保食神稚産靈
神大己貴命
和銅
○元明天皇羊鏡

或説云保食神稚産靈
神大己貴命
和銅
○元明天皇羊鏡

或説云保食神稚産靈
神大己貴命
和銅
○元明天皇羊鏡

或説云保食神稚産靈
神大己貴命
和銅
○元明天皇羊鏡

或説云保食神稚産靈
神大己貴命
和銅
○元明天皇羊鏡

六十六

松尾宗

詳見江次第六

同日

今案亂世以來上西日也神事延引之故歟

此宗も貞觀年中少くも一箇の天皇を
小奈の都理とつて人々を導く神座を建

立しつゝとて大山咋神は御事なるに
山乃神と因神とてまつりて

六十七

松本宗

同日

河内國より侍り神社なり平日使ふ所
私久年胃小奈いこも御事

六十八

當麻宗

同日

大和國より侍り神社なり平日使ふ所

六十九

當宗宗

同日

是の河内國より侍り神社なり平日使ふ所
杜本當宗の祖あり此宗も獨り使ふ社乃

七十

梅文宗

同日

系和乃此の母宗いこも一箇の天皇
毎年の事なり成りてそれよりあり

七十一

陽成天皇

同日

酒解子 彦火、出見尊
木花開耶姬

七十二

陽成天皇

同日

酒解子 彦火、出見尊
木花開耶姬

大山咋神御事也

事本紀第四大年神娶
天知迦流美豆姫爲妻
生大山咋神此神者坐
近淡海比叡山亦坐葛
野郡松尾用鳴鏑神者
也

社本 今トモト云小
社此歟不詳

當麻 開化天皇皇子
彦坐王當麻君等祖見
事 用明天皇皇子麻
留子皇子當麻公之先
也 見日本紀

當宗 社今國府總社
世世淺深秘抄下卷

云寬平法皇御外祖母
氏神在河内國所謂當
宗社也仍自仁和五年
被廢之或說曰實御母
儀中野親王女班子女
王云云

當宗氏 新撰姓氏錄當
宗氏出自後漢獻帝
四世孫山陽公之後也

神名 倭山 葛野

郡梅官坐神四社

酒解神 大山祇神
大若子 瓊々杵尊
小若子 彦火、出見尊
酒解子 木花開耶姬

ソレヨリサキハ行ハレ時モ
アリ 陽成天皇

公事根原

二行

元慶三年四月二日停
梅宮祭同八年四月七
日光孝天皇仁和元年
四月七日又始祭三代
實錄見一布

公事根原

仁明天皇乃御母篤太后乃御神
承和年中小初御門より祭と奉経
橋氏乃祀る也一是定といひく
人乃管領より社とてゆく也
法人乃家よりつらつら一
て後正月廿日敍佐小氏乃
人なくふらりて寛和の
と令子行一吋堂方と
乃事法了りたり也中
堂乃言白此人の母ハ
ひ一人乃しとら也
はじとら也中
らりて是定ハ藤氏乃家
是定ハ氏爵ノ事ヲ定行
此見ハ是定ヲ首氏定
註是與氏古字通耳是
請以右大臣殿定行氏
右氏人之中無公卿之
舊風爲中納言橋澄清
事辭退者以右大臣可
安元三年四月十三日

散位從五位下橋朝臣
散位從五位下橋朝臣政光
散位從五位下橋朝臣親長
散位從五位下橋朝臣清成
散位從五位下橋朝臣備定

公事根原

五

欽明天皇御宇

○袖中抄云志貴島宮

御宇天皇之御世天下

舉國風吹雨降令時勅

卜部伊吉若日子令卜

乃賀茂神崇也撰四月

吉且馬繫鈴人蒙猪影

而馳馬以爲祭祀因之

五穀成就天下豊平祭

曰乘馬始於此

和銅詠

○續日本紀元明天皇

和銅四年四月乙未詔

賀茂神祭日自今以後

國司每季親臨檢察焉

欽明天皇御宇

欽明天皇の御宇四月小吉日と云くひく由

はく海くく不見あり又和銅二詠あり

て山城の國司是と檢索とくみくは

とふ乃國司の聖書此奉祭なるくきく

酒乃日志まつり奉祭なるく使とく

孫れ走馬と歌く家ありひくくま

關白賀茂祭 同日

初度く日次と云くひて此事を王孫

二年九月女乃孫改書入信德陸家と讀ん事

る是孫國此人を賀茂祭乃くくめり

龜乃り此事の本賀茂祭乃くくあり

事乃り主人を奉車くて地下殿とけ

前孫あり白妙乃沖帶神受唐徒考

此物とくけとくく賀茂祭乃源

常といふ相とくくくく事乃神

孫乃社乃て神孫あり養植と孫孫

ゆめは是孫冠くくく東孫水子と

賀茂祭 中同日 ○四月酉二日中西

一乃日先と陣小とくく六府と史

西宮記賀茂祭

西宮記賀茂祭

西宮記賀茂祭

菘桂曼

續草菘集宗雅

クミミ神ト君トノモロカ
モロコニノカケテニエリ
モト出ニ春ニ葉其ニ
夏モシハラマアヲヒ草哉

二ノ神祭也

○二字下社字ア岑與

御祖○神名帳曰山城

國愛宕郡賀茂御祖神

社一坐

或神書曰健律之身命

伊賀古屋姬命

玉依姫○河合社也

河合ノカレトヨム又タノスト

モヨム鳥居西向立タラ

タス森林ト云七此社森林也

御祖河合與元大社也

此下賀茂也今俗此

ト云訛也下賀茂鴨字

書後世ト云也

云ミ小川○無名抄云石

川瀬見小川賀茂河實

名也

○山城國風土記云賀

茂建魚身命云葛野河

與賀茂河所會至坐迦

見賀茂川而言雖狹小

然石川清川在仍名曰

石川瀬見小川

○祭ヲ神生上ア別雷

生ニス日也ト云實ハ申日

カ神生ニ西月神生ヲ

祝フ儀ト云

俊成歌

ヨノカ今日自吉祭ニモ

ミコトノコノ古方五社百首

別雷命是也○神名帳

曰山城國愛宕郡賀茂

別雷神社亦名若雷

公事根原和

して堅固のりて我作と為目付使はと
 傍乃中少おつとし昔夢ははけ竹の
 子人くわあひ桂乃髪とく海也笑
 今月
 廣松尾志社司ま志日よりあまき
 所へへくく家次明天皇に御宇
 之を志奈いし海乃下鴨志津能上
 賀茂別雷之社神祭をりて志津能は
 玉依姫と名しと賀茂建魚身命をいひし
 此ヨリ以下別雷命神生ト山城國風土記賀茂縁起出
 也あつ時せむれ小川に河合のふあそひを
 多よ川より丹塗乃夫一とらちらんり
 玉依姫と志夫とらりて我家乃屋縁よこ
 いかせそれらりて経かくつみ
 男子とらひ結きども父とらきともあつこ
 葛野河賀茂河會所ハ主殿科也上鳥羽小枝橋西
 ともあわあつりり酒をりてせい
 酒を思ふとらりてせんらりて
 とらへちれいらごとのさうはなとら
 空りうげく家れ屋縁成婦とら
 て我の夫婦の沖子なりとてととと
 してぞのやりせら別雷れ命をなり
 い海も丹塗乃夫の松尾れ大の社と後河

公事根原和

三十一

大祀中祀小祀 ○神祇
令云一月齋爲大祀三
日齋爲中祀一日齋爲
小祀

冷泉院 石神也 ○古
事談第五中山社嚴神
者冷泉院中島令祀大
神給云其後事外放光
後冷泉院御時歎託宣
云門前車馬多時出入
不輒給此所一向欲往
云依之令去移他所給云

○江次策實書云吉田
祭永延元年始之元有
山法中納言一家所祭
也

延應三年六月十六日神祇所建立一一同
紀小紀より事あり一月に神事となふ大
紀といふ今此祭儀宗をとりて一日に
神事となふ小紀をとりて松尾平野山下
徳社に祭儀を設けり

七十九 中山家 辰日

永承五年六月十六日神祇所建立一一同
後冷泉院
六年十一月八日より延三位の神位をとり
て冷泉院天喜元年四月より一一同

官幣あり
冷泉院天喜元年四月より一一同

十 吉田祭 中子日 江次第六

この社の中納言云山麓御自叙乃比下ひ建
立して一條院永延元年より一一同
官幣をとりて一一同
神々宗より末に神の日社長是れ宗を
時の大原野いすれ平安城の時の吉田社を
と相帝都らに祀るを志し一一同
利をとりて一一同

法成寺と吉田社と成わらひ給ひし事
奥福ちと春日社とに仰りし事
ちとそとけし事

十一 駒亭 廿八日

御監 御馬監 牧之意

この後四月小侍ら車なる八月末に名
うしきれと心いれ利天皇武徳殿
まよまのし下麻子小侍くら右左
沖馬儀奏とと馬以庭ふりし事
と引渡と白ふ心事會れし事
長場御村を南よりし西村御村は
奏と左右大おられと奏しし事

新日吉今皆積院北隣
豊國妙法院古法住
寺殿也
東南也

諸神記 外記番記

萬長とと人おけし事と奏す衣と
細藤御村とととととととととと
駒形御村とととととととととと
手人けしとととととととととと
けり自願のしとととととととと
法成寺廿七日けり延長五年の
約引ありとととととととととと

十二 新日吉 廿日

二條院年号
永曆元年十月十六日好白門院日吉

云永曆元年十月十六日庚申後白川上皇被渡日吉御體於東山新宮

○率川一坐大神御子神社一阿波神社一俱率川社也

○古事記中卷云垂仁天皇之子大中津日子命者三枝之別等祖也
○姓氏錄十七三枝部連 天津彦根命十四世孫達已臣命之後也
顯宗天皇御世諸氏賜饗醢于時宮庭有三莖草獻之因賜姓三枝部連

○顯照法師云三枝カ
ハヒニヨス

○古事記中卷云伊須氣余理比賣命之家在狹井河之上天皇幸行其伊須氣余理比賣之許一宿御寢坐也其河謂佐井由者於其河邊山由理草多在故取其山由理草之名号佐草河也山由理草之本名云佐草也○此天皇神倭伊波礼毗古命也

伊勢と東山乃新文よりくくくくくく
と新日吉よりくく保こくく月昔始
て系あり

全三
三枝系
三々々

大和國添上郡率川阿波神社云云是カ
集解 大神族類之神也 率川下引之
○神祇令三枝祭 義解謂率川社祭也

くく三枝系の率川系とくくく神祇令く
のくくく三枝系花をわりて酒樽をくく心
あり三枝乃系くくはくくく三枝系をく
二月乃率川系とくくくくくくくく
上四日
三枝紙令くくく夏法系れくくくくの
拾芥中未四月推全日事三枝祭より
終の先くくくく月れ下くくく率川

系の右大臣是公乃建立くくくくくく
今案率川三枝別社也率川社南有三枝御子社諸神記云件社右大臣是公
建立也因茲南家苗裔行此祭

法のくく事介り此系の令とくく書法海之れ
くくく運て表老年中より奏演くく系
是公れ大臣の法海之れ常孫介りくくく小
南家始祖武智麻呂孫
令り率川社とつれは是公れくく
令義解
て建立小くくくくくくくく表老年の
くくくく有けり神祇是公乃再興
くくく建立くくくくくくくく

三枝と書くくくくくくくく
三々々

五月

廿五日 獻葛蒲

三日

アラスシ。○延喜式左
 近衛府式凡五月五日
 藥玉料葛蒲艾一摠盛雜
 花十棒盛發三日平且
 申内侍司列設南殿前
諸府
准此
 ○水葛蒲ユカ 唐テ端午
 唐蒲ヲ酒清ノ飲ハ石葛
 蒲

大府あやめり興と南殿乃階北東西より
 きたり乃敷とわたりとておなりとて
 四日あさくれあし乃庭より是とて
 察取小志老う梅少く天年十九年五月
 ？詠ありて百夜徳人、春葛蒲乃鬢と如
 かりかりとてめ者ハ文中小入る
 乃とてはたゆる弘仁式にも葛蒲もはた
 ありとて早止小南殿乃前小とてあり

廿五日 奉命

○藥卷河海柳々々續
 命續靈絲綵絲綵索十
 下カケリ何モ藥玉體也
 五月五日絲所藥玉ヲ
 供ス去テ菊花草菓莫ヲ
 疑ニ御帳番住結付也
 藥浦消息云今朝身或
 所給藥玉一流作以百
 草之花實以五色之纒
 雜草虫形極其花是方艷
 之美有興有感古人云

天皇武徳殿一 神宮なりて宴會とて
 御宴群臣小酒と給あり内群臣とて
 元日七日十六日豊明
 四節は同くを承あやめれとて
 日蔭乃つとて思〜典藥察あやめ
 御案〜そをも何を群臣小藥玉とて
 大色のいひ成〜むじり〜り
 思〜す〜も〜も〜も〜も
 騎射乃事あり大將射し乃奏とて
 乃衣を侍馬小家〜存〜とて

八書根原中

三十一

懸命縷則益人命云

五色之縷荆楚歲時

記云以五絲縷繫臂名曰辟兵令人不病瘟

○事物紀原九端午端初也

○珊瑚鈎詩話二端五之号同於重九後世以

五字爲午則誤矣

高辛氏惡子一本據タカト

○此

○事物紀原云糴一名

角黍風土記曰以菰葉裹粘米以栗棗灰汁煮

之令熟節日燂取陰陽尚包裹之象一日因屈

原也齊諧記曰原以五

月五日投目羅楚人哀

每至此日以筒貯米

祭今市俗置米於新竹筒中蒸食之謂之艾筒

其遺事亦見筒糴齊諧又記曰

今世五月五日作糴目羅之

遺事真楚目羅屈原姊所作

○河海抄云左近馬場

一條西洞院右近馬場

一條大宮也

しまゆきこもいへり雅を天皇の沖宮も

しとゆき今いへりていふ代ふり或は

高辛氏惡子

くよらま紀と食事をさる者言辛氏の惡子

五月五日小舟小舟を海に下りてり一時暮

風俄小舟を浪に流すをさるる水神と成る

常々人となやまたあはる人みなこれに

てらゆきとして海軍おけりけり

大色乃被詔とゆふそれよりあはる海神

人代りやまはるゆふの舟は

ゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき

ゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき

ゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき

左近馬場騎射

五月二日いさをる志を法四日衣近り

張五日衣近り志を法六日衣近り志を法

七日衣近り志を法八日衣近り志を法

事ゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき

ゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき

ゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき

高辛氏惡子 五日

高辛氏惡子

五日

○諸神記云正曆五年六月廿七日被安置疫神於船岡山長保三年五月九日被遷至疫神於紫野京師兼庶行御靈會被遷此所依靈夢之吉也

○又云神殿三宇瑞垣等木工寮修理職所造橋也又御輿内正寮造

世中廿六日○發心集第四云京人多クマシテ世中サハカシテアルイフ○徒然草主上ノ御惱大カク世中ノ分が半時ハ五條ノ天神^群ヲカケル

二種ハ疫癘カシキナリ心唐ノ子長保ノ子
天下ニ^{五月九日庚辰}所^ニ法^ニ社^ニ
タリ^ノ長^ニ結^ニ言^ト海^ニカ^シキ
カ^シキ^トワ^ルル^ト拾^遺小^行カ^シキ^ト

藤原長結

拾芥上卷二藤原長能伊勢守倫寧男伊賀守從五位上

何^カカ^シキ^トワ^ルル^ト拾^遺小^行カ^シキ^ト
此^ノ或^ノ人^ノ云^フ法^中ニ^テカ^シキ^トワ^ルル^ト
ト^ハ舟^ノ思^ハル^トカ^シキ^トワ^ルル^ト拾^遺小^行カ^シキ^ト
何^カカ^シキ^トワ^ルル^ト拾^遺小^行カ^シキ^ト

半九^ノ有^無日

廿六日

是^ノ村^ノト^モ皇^ノ皇^ノ沖^ノ國^ノ志^ノナ^リ文^ノ律^ノ小^ノカ^シキ^ト
ナ^リ一^ノ日^ノカ^シキ^トワ^ルル^ト如^シ廢^ノ勢^ノ日^ノ小^ノカ^シキ^ト
是^ノト^モ改^メカ^シキ^トワ^ルル^ト拾^遺小^行カ^シキ^ト
ト^ハあ^レれ^ノ儀^ノ小^ノ改^メカ^シキ^トワ^ルル^ト拾^遺小^行カ^シキ^ト
法^ノ中^ニカ^シキ^トワ^ルル^ト

九^ノ寂^ノ勝^ノ傳

中^ノノ^ノカ^シキ^トワ^ルル^ト拾^遺小^行カ^シキ^ト
カ^シキ^トワ^ルル^ト拾^遺小^行カ^シキ^ト

東^ノ大^ノ真^ノ福

備^ノ法^ノ中^ノ小^ノ行^ノカ^シキ^トワ^ルル^ト

園城寺 二并寺也

○月令正夏之月新薄
刑決小罪出輕繫

公事未決

車行り元明天皇法御宇和綱より下
まら月令れ今又うはま夏八月よりま
しとみくされと四月の御月にて祓事
しとみくされは五月子よりまら

六月

御贖物

是は一日より八月まであらはら
まら御贖物をまら御贖物の御贖物
けと括あらくまら御贖物の御贖物
あま御贖物の御贖物

素盞烏尊十座置戸

罪過於素盞鳴尊而刑
之以十座置戸遂使微
矣私記座者置物之名
言十處置積積物也戸
積置物便為其戸令罪
人出其中故曰置戸纂
疏戸詞助無意義二百尺
所出也出内其物故曰戸
○江次第抄今案御帳
再間為大床子間也

御贖物乃車ふるまら御贖物と奉ら
まら素盞烏尊れ十座置戸まら被り
りまら御贖物の御贖物

御贖物 同日

内膳司よりまら御贖物の御贖物
供よるまら御贖物の御贖物
忌火とい火を御贖物の御贖物
を不浄乃火とまら御贖物の御贖物
決御贖物の御贖物を合りまら
りまら御贖物の御贖物

御贖物

九十五 供醴酒

同日

又選七命註竹葉酒也本草綱目二十五竹葉酒治諸風熱病清心賜意淡竹葉煎汁如常釀酒飲

百濟人ワタリテカクシタリ
○古事記中卷品地和氣命坐輕島之明宮治天下云知釀酒人名仁番亦名須々許理等參渡來也故是須々許理釀大御酒以獻云云

ハレヲヲリシ酒ハ八醴酒ト書ハ度醴ヲカケル酒也酒氣ヲ烈セシ爲也此酒ヲ八岐大蛇ニテテ酔シテ斬殺シ稻田姫難ヲ免シメ玉ハリ神代卷ニ詳也

○五月 小廿七日延曆寺六月會始七ヶ日 見古曆
○元亨釋書第一釋家澄世姓三津氏近州滋賀郡人也云弘仁十有三年春二月賜宸書傳燈大法師位記夏六月四日於中道院右脇而寂年五十有六云貞觀八年秋七月敕謚傳教大師

○古語拾遺云至干難波長柄豊前朝白鳳四年

一取さけしなほきおほくまはわきの供にさかり一取とくごころ竹葉乃酒をれ一取酒とりなり又いこざけとも或又お作り昔の口中お未と嚙て宿とるく酒お徳もあやこ法酒の造酒もきまらぬ七月廿日まで日毎うし守ぬそり座神天皇を御時うらりまおなすそ酒と法の家事といぬる百海乃人さうりてはくつと下りてのさうりささるな酒とのお物なりと人傳まると作代より系茂高島藤田姫れさあふ大蛇とく絶され一時ハヤおの酒を作らる事神代よりを伝ふたはり酒の事神代よりを伝ふたはり

九十六 延曆寺六所會 四日

是の傳お大師の忌日也勅使登山をいぬる延曆寺の延曆年中よりつらつられ作らる手号ふ付く法名残えらる

九十七 御饗神代 十日

神祇宿友人一昨日より奉友ふこころりて是

年以小花下齋部首作
賀斯拜神官頭分神祇
令掌叙王族官内禮儀
增烟上筵事夏冬二季
御上之式始起此時云
○此御上公龜上也朝野
羣載第六御體御上
奏狀アリ
○式云月次祭 奠幣
案上神二百四座並大

○上卿着北廳座
木綿言基本紀云木綿
謂以裁木在日和幣名
號木綿天神代地神
五代神人等著木皮藤
綿縁也潔齊之日清湯
之祭服是也也

○御巫習見幣物三人
出自西屋始自伊勢三
百餘所

種今食○日本紀私記
云古者謂木爲介故今
云神今食者古謂之神
今亦必以木爲喻者
シシコケ シシコケキ
○香芥中末云中和院
内裏西号中院神喜殿
奉祭社稷神所

とくさふとくさふまのりて内侍小使さ
て奏すとは是のまを流玉飾りし神つと志
にわらわし事とくさふとくさふ奏すは義なる
風當作雅
白鳳四年六月十二月必行ル神事故上毎月十日ニテ

解次祭 十一日

に終は先神今食前上二神祇宿儀水門の
内東玄換小奉く信神相カクとカクの
ぬ次小庭小津りく事と約姉祇宿安
掌祝詞と祝師祝を庭へほく奉
庭人カクの礼本御とつとるりカク下カク

薦座小とりく神巫幣物とみく做あり
に終は六月十二月必二度流社へ神幣をま
務終小事也弘仁年中小此事り内家
九十九 神今食 同日

御神事八日カクりりカク成刻小約
幸ふ先カク大忌カク神湯とりカクトカクありあふ
ららカク陣小とくカク難とカクりカク諸目れ
カカとカク小カカ神燈を供むとカク此カカ
清カクりりカクあカク毎カクりカク亭相少納云
御記史ト小あひカクり人小忌とカクきカクを流

葱花の御即位和字記

云被花上キ花多金
ミテ行テ御輿ノ上スヘラル
長ハ御神事時ノ行幸
スルハ御輿也

神嘉殿

○拾芥中末神嘉殿中
和院正殿

時ヲ申ス

○年中行事ニ云トアリ

圖同○江次第抄ニ關
司掌官關管鑑及出納
之事故開門之後分若
左右監護羣官之出入
也

打掃官サカ枕○延喜式

第三十八掃部寮式

西剋官人己下掃部己
上ト食人十人持御座
等物自大龕宮北門入
鋪白端御幣十一枚布
端御坂枕一枚於悠紀
正殿中央又設打掃布
一條納揚
又坂枕一枚長二尺五
寸廣三尺
料編薦一枚生絲一兩
長功一人小半中功一
人大半短功二人坂枕
薦枕歐日本紙武烈紀
私記云師説古以蔣爲
枕

司寢人も之れきつるべし約幸忍心時御輿の

江次第云有行幸時於中和院行無行幸時於神祇宜被行

葱花の御輿の冷乃奏るべし中 和院

白木大床子立御座白縁也

約幸ありて神嘉殿に大床子の御座不

つ坊給ふ御座の儀案女時を尸内侍

髪あげて神殿小ありの寝具を供は

可平之云

と終らるるに衣を供はし殿に赤

ぬい陣を引同の園司をといはるるに

神殿の儀小ありの儀左右を以て

おとろく一人とてみて御座を給はるる

ととととと南に戸をた右儀帳の儀

ちりひ忍箱の枕八重の儀

儀辨が納之御座次第より先と供はる

へとの入あははの儀もんの儀も御座と

志は南枕ふと先一丈二尺法とて

ふふ六尺のつみ四でう枕乃と二帖

あり其ふふ九尺れ中七帖とて八重

ととととと九尺志中一帖といはるる

御座いてとととととひ法とて

さの枕の八重をけみ下小枕とて

侍もいりて御座とて八重をけらふ

神皇正統記 卷之八 神代卷 八

神皇正統記 卷之八 神代卷 八

神皇正統記 卷之八 神代卷 八

神皇正統記 卷之八 神代卷 八

神皇正統記 卷之八 神代卷 八

神皇正統記 卷之八 神代卷 八

神皇正統記 卷之八 神代卷 八

神皇正統記 卷之八 神代卷 八

神皇正統記 卷之八 神代卷 八

神皇正統記 卷之八 神代卷 八

神皇正統記 卷之八 神代卷 八

神皇正統記 卷之八 神代卷 八

神皇正統記 卷之八 神代卷 八

神皇正統記 卷之八 神代卷 八

神皇正統記 卷之八 神代卷 八

神皇正統記 卷之八 神代卷 八

神皇正統記 卷之八 神代卷 八

神皇正統記 卷之八 神代卷 八

神皇正統記 卷之八 神代卷 八

白黒御酒。永享二年

十一月康富記云醴齊也白者自其色也黒者

上聊振烏麻粉

モトカレハ古今第十七

雑司上

イソノカニフルカラシノモト

カシハモトノ心ハワスラシ

クニ

抄云モトカレハハ久と落葉

スナカ春ニ枯タル葉ノ

少シ残リテアルヲ云

○一條家相傳十二合

文書内太宰納大嘗會

神膳

テラヒ。日本紀持統天

皇紀常字ヲナラシメタリ

ルヨメリ常ニハ直會ト書

康富記

○神膳 寅一刻供之

四刻撤之

八事 原中

三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

神皇正統記 卷之八 神代卷 八

神皇正統記 卷之八 神代卷 八

神皇正統記 卷之八 神代卷 八

神皇正統記 卷之八 神代卷 八

神皇正統記 卷之八 神代卷 八

神皇正統記 卷之八 神代卷 八

神皇正統記 卷之八 神代卷 八

神皇正統記 卷之八 神代卷 八

神皇正統記 卷之八 神代卷 八

神皇正統記 卷之八 神代卷 八

神皇正統記 卷之八 神代卷 八

神皇正統記 卷之八 神代卷 八

神皇正統記 卷之八 神代卷 八

神皇正統記 卷之八 神代卷 八

神皇正統記 卷之八 神代卷 八

神皇正統記 卷之八 神代卷 八

神皇正統記 卷之八 神代卷 八

神皇正統記 卷之八 神代卷 八

なり伊勢天照大神と初詣しされく天子
元正天皇
御まつり神饌と供物と後詣りも
表二月六月より一ヶ月
百 供解御沖糰 十二日

御之也。江次第第二云
人供御粥。高盛也。
次又供和布汁物。以上
器
大床子。後醍醐年中
行事云大床子北ニヨセ
テ南向ニ御下。水ヲ置
テ御手水。義子供大床
子ニ案ホタラヒテスミ
ク其南ニカシ上ホトキ一
御手水ヲ柄杓スナリ御
手水。一土器下ノチウニ

御手水乃具と木さて御手
水水より
ハ裁あり次小案よとさし
一減らり御手水
ひまて三あり御手水
おそは十二百小案あり
事し御手水とて供して
冬神祈いさるる式
百一 祇園沖糰會 古目
御靈會行也
十四日御靈會也七日神輿
御旅所出七ケ日十四日

テラナレヲク其南ハ脚
ヲタテ、御手拭ヲク配
膳人三柄杓カケテ後御
手拭ニル

○今、祇園観慶寺感神
院之地
○新千載 顯詮
千ハナル神、園ヲユラタスキ
カクテイテ代、未守ルニ
○諸神根元抄圓融院

吉部秘訓抄第四御靈會馬長以下装束事建久元六十四記云今日祇園御靈會也頭
京宗頼朝臣馬長騎二騎不似此儀之由有難人言是父祖之例云確一八蘇芳者云

天祿元六十四始御靈
會自今年行矣

○峯相記播磨廣峰ヨリ
ウツタリトアリ

○南海ノ琉球國ノ云
琉球人ニル今越來親
方ナト云名ヲ付ナリ

○牛頭天土蘇民將來
等事 蓋其内傳ニモ載
タリ備後國風土記ヨリ出
タル事トハ古ヨリ言傳タ
ル事トキコヘタリ

直指秘傳抄第十三神
代外録曰ソサヲ尊根
國ニククリ至フ時雨ニテ風
ニフカレ卒苦ナクヤリテ
宿ヲ諸神ニカリクニハトモ
テ神ニルセス時ニミクワノ
國ニ蘇民將來巨且將來

トイヘル兄弟ノ者アリ
蘇民家負ケレトモ心憎愛
惠也巨且家富ケレトモ
心情不仁也素蓋鳴尊
先宿ヲ巨且カリ玉ヘリ
巨且カレ奉ラヌ蘇民ニ
カリタニヒレカハカレ奉リヌ
且又奉養饗宴涯分ノ
及所ヲ盡セリ素蓋鳴尊
此ヲイワヨロヒヲヒシイ
カニシテカ恩ヲ謝セトヲホ
シヌ時其夜アハノ國ヨ
リ暴疫鬼來リテ國民ヲ
ホロホリトス尊豫其事
ニロシメテ蘇民ニ告リタ
ニク此夜此所ニ惡神來レ
ヘシフシ者ハ亡散スヘ我其
禍ヲ除ク方ヲ知リ汝等及
家内ノ者等茅輪ヲ帶
シ然ラハ禍染著スル不能

公事根原中

神流ハナリ一祇園カニ社自叙十一子小託

根元抄云昔常住寺十禪師圓如大法師依神託貞觀十八年奉移山城國
郡八坂郷樹下其後昭宣公感威驗壞運臺宇建立精舍

貞觀十八年七月十三日而授播磨國無位速素蓋鳥神從五位下

素蓋鳥カニ奉部トシ牛頭天白皇太子

天神トモリカノ昔武塔カニ神南海ノ女

子トシガヒナカニ時ヨリ書テ延喜

延喜ノ小神トシテ子小ノ信前小神

民將來巨且ト云二人者あり兄弟ト

あり一ツ兄ト云一ツ弟ト云あり一ツ小

神ト云一ツ弟ト云一ツ弟ト云あり一ツ小

神ト云一ツ弟ト云一ツ弟ト云あり一ツ小

神ト云一ツ弟ト云一ツ弟ト云あり一ツ小

神ト云一ツ弟ト云一ツ弟ト云あり一ツ小

神ト云一ツ弟ト云一ツ弟ト云あり一ツ小

神ト云一ツ弟ト云一ツ弟ト云あり一ツ小

神ト云一ツ弟ト云一ツ弟ト云あり一ツ小

神ト云一ツ弟ト云一ツ弟ト云あり一ツ小

神ト云一ツ弟ト云一ツ弟ト云あり一ツ小

神ト云一ツ弟ト云一ツ弟ト云あり一ツ小

神ト云一ツ弟ト云一ツ弟ト云あり一ツ小

神ト云一ツ弟ト云一ツ弟ト云あり一ツ小

公事根原中

四

蘇民命レシカフ其夜夕
ニ暴風トアリヌ明朝其
所ノ人民悉ク病惱シテ
或死或病キ尊又蘇民
告テクニク後世疫氣流
行セシキ汝カ子孫家門
顯テ蘇民將來子孫病
書シ只茅輪ヲ門楣ニ
懸ヘシ然ラズ疫氣ノ禍ヲ
ニスカルヘト世俗今兩額
蘇民將來子孫處ト書
ハ此故事也

○諸神根元抄云天延
三六十五始被奉走馬
勅樂東遊御幣等使左
少將藤理兼左右御馬
有五尺左右近官入供
奉東遊歌云神風ノ八坂
ノ里ト今ヨリノ君カ千歳
計始ル此後中絶崇徳
天治以後每羊相續

かろりとれしきよとくの後夜蘇天下小
たごん時ハ蘇民將來子孫ノりといひ
く茅丸輪とくけいノ性若難浅のつき毎と
のつきひきろく又祇園乃縁記小のきて
のつき天竺より小国ありぬ相いりた
其國乃中小室あり若祥といふ其園此
中より城あり城小五河つと牛乳天竺と
つと又武塔と社ともいふ沙湯羅龍と
女と居しして八王子とくたの八島四子と
五十四社乃眷属ありといひの沖雲會の時
四条京極とて粟乃沖飯と奉らハ蘇民將
來乃連珠とてたぬ

百二 祇園陰町 十五日

沖襖とて儀儀大くハ平野小むり
ひ殿と立徳東極とてすく新宮ぬと天治
元年六月よりしりし又く志馬
勅樂カをとりて延三年乃馬好れ
奇小いし

五崇徳院

奇圓融院

神代卷云八坂瓊之五百箇御統纂疏八坂出玉之地
君の子年いりて人しりて

八返北里といふは法祇園なる山城園を
宿部ヤサカサトの返御といふなり神祇院也
法々るあり

節抄

廿日

節抄節抄也和名鈔兩
間節俗云
御長御始一
江次第云次神祇官及

晦日ツクシの夜沖あつぬい系あつ世心世

荒世卜部進置竹夜於
庭中席上中臣官人卜

此沖装束二回又沖風和節也とて沖座

部等解畢授中臣女
取供之天皇起給與女

とて沖あつぬい系あつと孫孫

量御體五度先量身長
次量自兩肩至御足次

の池乃清子志南乃一回座和節也とて沖燈と

左右手自胸中至指末
次量左右腰至御足次

と燈燈とて沖あつぬい系あつと

自左右膝至足凡竹九
枝中臣女每度兼取次

との蘭のつとて沖あつぬい系あつと

和世參入如荒世儀示
神祇官堂内放口氣三

引引て文室沖和とて後とて沖あつと

度迄
右見清凉御記内裏儀

とゆせいの具足あり又卜部竹行のつと

式
荒世和世上二度あり

海申此座席と小とて沖あつと

和世和魂と祝言爲也

とつとありて沖あつと

とつとありて沖あつと

とつとありて沖あつと

とつとありて沖あつと

とつとありて沖あつと

とつとありて沖あつと

天武天皇御時

○日本紀天武天皇五年八月辛亥詔曰四方為大解除用物則國別國造輸被柱馬一匹布一常以外郡司各一鹿皮一張鑊一ロ刀子一口鎌一口矢一具稻一束且每戸麻一條此事始主見(ハ)神武天皇ノ御時天罪國罪ノ懸(ハ)リ神功皇后ノ御時國之大被(ハ)リ六月十二月大被(ハ)リ八神祇令延喜式載(ハ)リ

三ノ此歌作者不知古今六帖第一載之

ナシ園大曆延文二年卷二云ナシト云ハナシト云心歟鬼ヲミラシク也

思

此歌ハ和泉式部歌也後拾遺和歌集第二十神祇水無月(ハ)シ

和泉式部

あまのこころをなつさしめてあまのこころをなつさしめまつりてとらへはる

高天原

同日

大日乃命より六百官(ハ)シク(ハ)シ米菴(ハ)シ
あひま(ハ)リて被(ハ)シ志(ハ)シ(ハ)リ(ハ)リ六月十二日
こころをなつさしめ武天皇(ハ)シ(ハ)シ(ハ)リ(ハ)リ(ハ)リ
解除(ハ)シ(ハ)シ(ハ)シ(ハ)シ(ハ)シ(ハ)シ(ハ)シ(ハ)シ
初(ハ)シ(ハ)シ(ハ)シ(ハ)シ(ハ)シ(ハ)シ(ハ)シ(ハ)シ
名(ハ)シ(ハ)シ(ハ)シ(ハ)シ(ハ)シ(ハ)シ(ハ)シ(ハ)シ
神(ハ)シ(ハ)シ(ハ)シ(ハ)シ(ハ)シ(ハ)シ(ハ)シ(ハ)シ
之(ハ)シ(ハ)シ(ハ)シ(ハ)シ(ハ)シ(ハ)シ(ハ)シ(ハ)シ
ち(ハ)シ(ハ)シ(ハ)シ(ハ)シ(ハ)シ(ハ)シ(ハ)シ(ハ)シ

大神宮年中行事

此(ハ)シ(ハ)シ(ハ)シ(ハ)シ(ハ)シ(ハ)シ(ハ)シ(ハ)シ
法性寺園日記

思(ハ)シ(ハ)シ(ハ)シ(ハ)シ(ハ)シ(ハ)シ(ハ)シ(ハ)シ

切麻事也江次第云神祇官頒切麻
此(ハ)シ(ハ)シ(ハ)シ(ハ)シ(ハ)シ(ハ)シ(ハ)シ(ハ)シ

Handwritten text in the top right section of the page, appearing as a list or series of entries.

Handwritten text in the middle right section of the page, continuing the list or series of entries.

Handwritten text in the top left section of the page, possibly a header or introductory text.

Handwritten text in the middle left section of the page, continuing the list or series of entries.

Handwritten text in the bottom left section of the page, possibly a footer or concluding text.

Handwritten text in the bottom right section of the page, possibly a footer or concluding text.

